奏海京

ヘ 13
3243
3

平松町
本惣
諏訪多

賣油郎卷之四

芝屋芝叟　遺話

○九面きちとはきもの

當下長松下の赤屋八。閑房よりて。新火鳥おほひよさい
かしをとゞめ。何事とたづねるに。火車まりて。ふう
しこのゝ式告て。ゆくのくろくと。赤屋ぶりて厨場へ
出て。余を御とゝるよ。美寸指ハ美やうるもど。精神
こだまず。更ゝ風頭ともおほえをとへ。且合家のおと
ゝづゝとゞふ死抑の主ねをハ。不謂ある事を早く
推し。余を御式閨房へ徙し。事の仔細と問ふ余を御

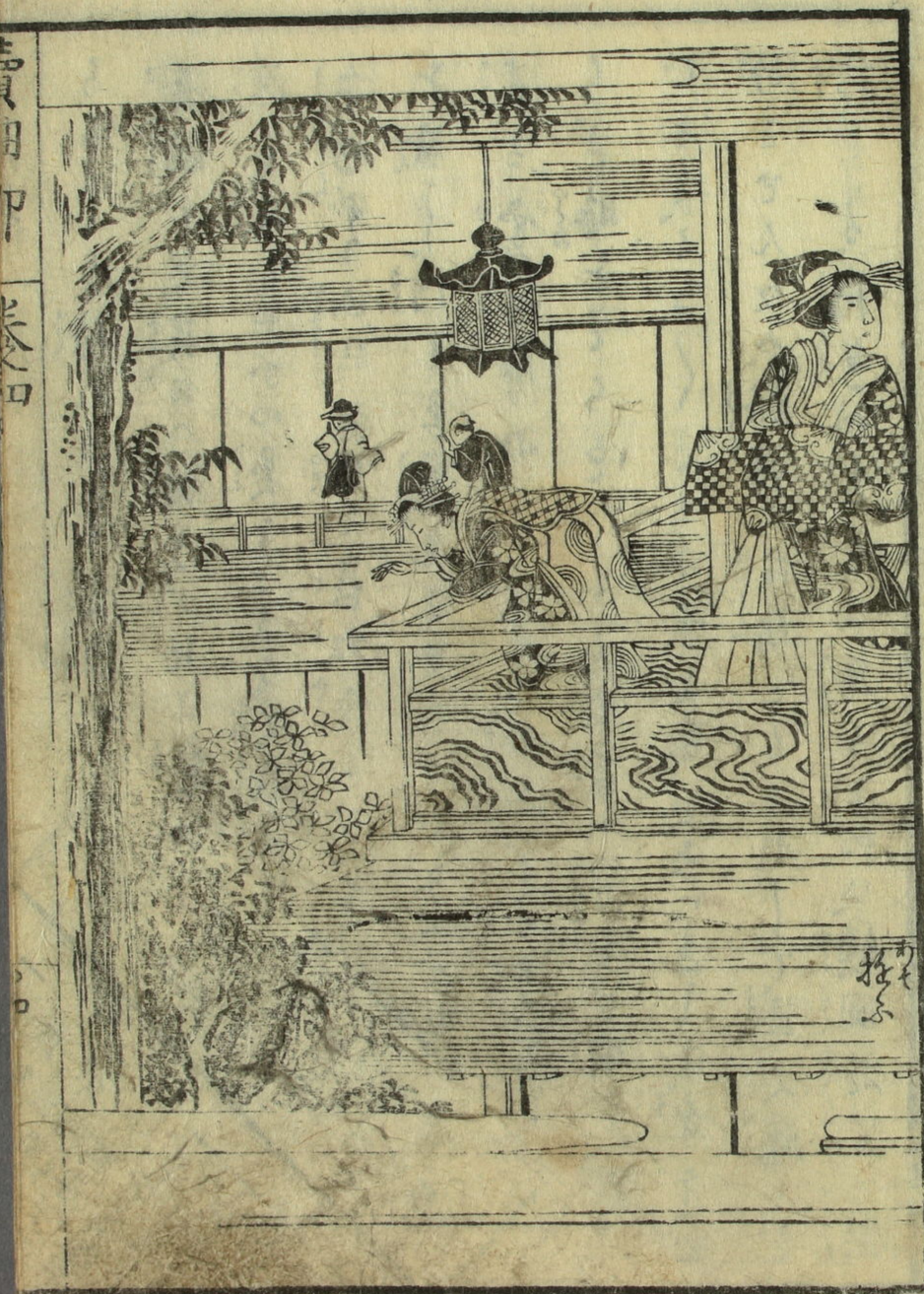
門へ13
號3243
巻3

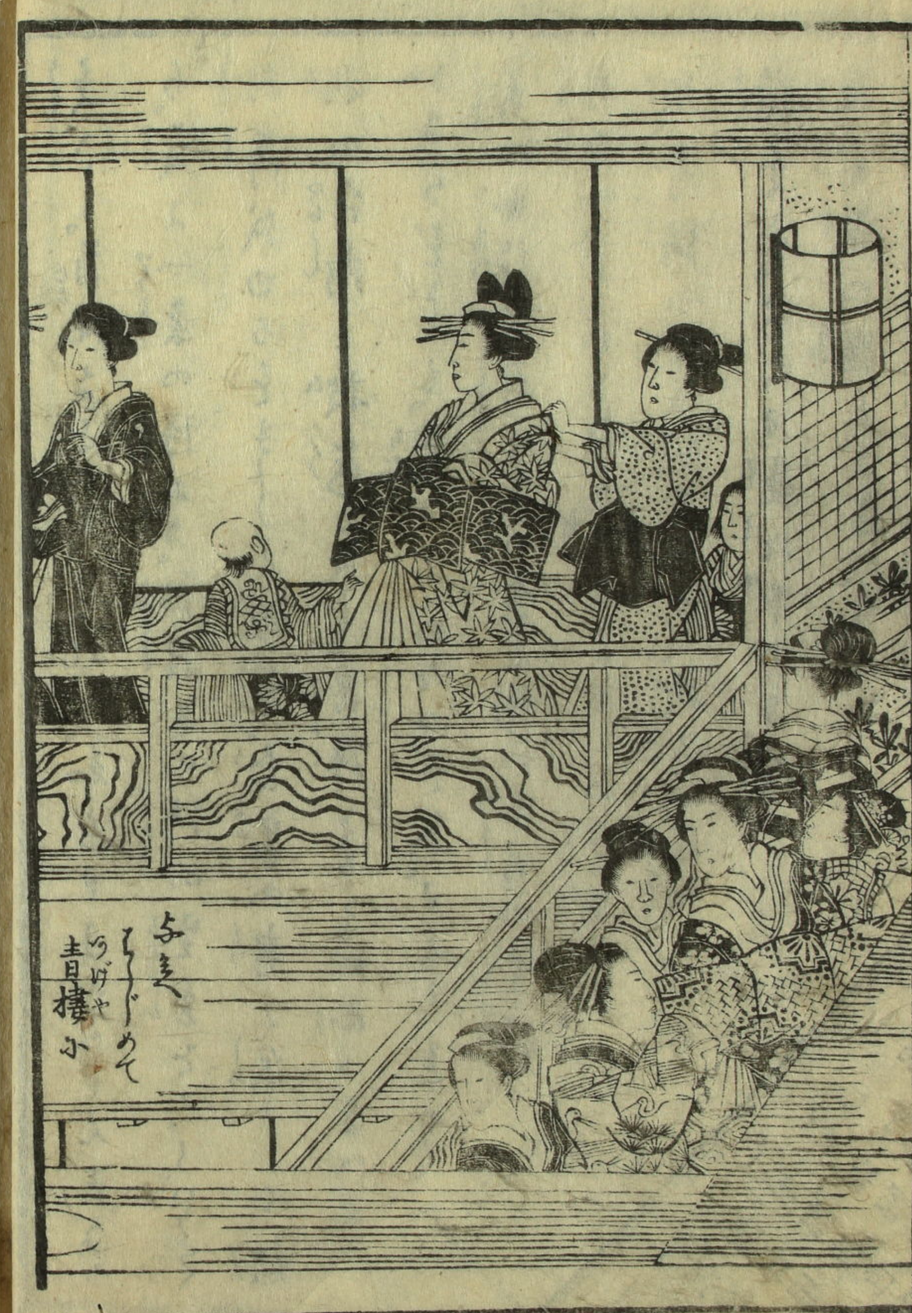
生のごとくなるべし。拙僧を一枝もとめたまへと
いへども。あるべき的いづまよりも。苦しからずやと問に。
余を閣のいらく。我拙僧屋のあづま路より。外化の
娘を会はしめと。答へ。東道のひといふも。彼いま此廓
の出名よりて。其名遠近に学えあまた。詩歌よハ秀逸
なれども。格調よあたいなくして。費多くまうく。客人
とえらまて。撰まて奇偶を定めず。しつとも客人よまた
ハ強ハ強ぜずといへども。ふるまふ事よ。其体よハ姫よ廓中
ふまりて。他と類たまへの人なるもの。彼義引を固かる
べしとて。余よ勧。撰地差つまり。志づく

黙してゐる。しばらくして。伝と定め。彼あづま
路と。朱雀野よて。無想せしむ。一年余の辛苦をつ
くして。我の発機。衣新調度の費用まで蓄たる有技
有系をつぐらよかうの法。嫉ましかの美金解恨と出
しえせるべ。東道ハかまを学てきと見て大ひの歳
代して情。教田思して后。余を衝よ向ひ計らふ
べき青ありとて。早速よ人をもらせて。因あつま路ば
動静をうかがハしむるふきのうち浪花の台閣百花
楼といへる。揚屋よ居住けよて。拙あをとも定めおく。
乃後十七日うち二日ハ。風月楼の揚。十九日うち廿五日迄も

そべて樓々の客朝あさぼらけ。廿六日まらでい閑日なし。
そもそも扨白雪樓よ。淺賀の客人の爲やくそくあるに。
ちゝとの諸ひが〳〵と苦来く。治宝ハ廿八日ねらて待せ
かたをとつよ。東左大をふ来の毒よふりい。今月おれ
ぬるぐ〳〵。かむうの出を的ゐるをべ。せんをべるし。
廿八日を約して。数日を待せのくるる引こ爲ふ。余を潮
くるしからぞ。たとへ幾日を待も。東左がまんきんの
抗もちよて。四ひどよ時とべ。けうへの幸るしとうろびぬ。
東左も南ひの利欲とうとをて。一日ねうとも早く幸
のふまうしとて。廿七日よい爲約来とふをべ。狂てもうらい

爲べし。首尾るさべ人と弛て。知らせまいらせん去なら
ら。爲よ一条の陳ある。彼君その体の生を志しがうく
抗摩式ゐるをまゝと推量。合家の者ヨ示して。鬱
羽の合閉と披爲をべし。其体もその心うまへよて。
かるらぞしも。賣油郎のたつき式さとらきのくると。
美の心ゐを尋ねをべ。余を潮い来左の爲語を。家菴ら
再世のぐ〳〵おうひて。大まよろこびを日へ。山湯ふうつて
后。奇偶の日ゐ。かぞへるい。狂るの正月をたのしむぐく
待をし。廿六日長松下う人と弛せて。廿七日ハ志うと
白雪樓の揚とるをべ。廿八日をやうくふ約しうう。


ふる
ちらでめて
つげや
主目樓ふ



らをしも侍ぬるよ。火車の文をもて送をば。余を懈
怠踊して。其日の朝まゞたる髪を梳て顔洗はして
沐し。又もやかの美やうなる大搖るの衣裳を着して。
午時ばかり山陰を出て。長松下ふいたをば。東屋うれば張
と家じ。何とぞ首尾させんとおもふがゆへ。死街に
来る雲油鼎ばかる事。かりに外なるものあらばうれ
らざ晦をとらをべしと。合家の男女を固く禁し
むるよ。るるくともふ余を懈をあいまして。幸をと
げとせんため。鬆羽の台昇ともてはして。且大廳ふゞ
徒じる。死者の色者よ搖るものゝ。傾國絶望の樂

れをども。余を懈いたゞ涙を灑よのをむがごとく。戦く
懈ゝ。こして。遠の産上よ通をば。火車玉筆をとりげ
出。仲居ハ餞をしらん。余を懈いをあそびの。鉅想たがい
ちう幸を嘆じ。密うよ宗菴ばおしへと仏中よ為をを。
先の扇面を開きて産右よおを。東屋が差号よ歌妓
三人来をば。火車仏はて。孤客の遠間るをやうを
斗ひ。ねあづま踏ば方へハ。近ひの人搖をかけてをる。
ひたをを玉筆をを。歌妓ハ三絃をとりて。おのし
歌妓と奏ををば。先制度のいるれるを。余を懈ばけ
て曲ないをば。声と一段をうして好しと讃るこを声来

棘くべ。席上一日よ。面とえ会して笑ひと思ふ。日既に暮て。菊燈髣髴やけども。あづま浩いまゝ来らず。余を湖ハたゞかゞ一條のおもいくれをば。公中大よもとは くといへども。大廳いゑ永く狂べよとの教ハ。ゝぞと其えとおのびて。風ぐりとえせんと。幇間二三人まねくべし。寛陶よいひをば。仲居どもそゝくといひて。人と弛ぬ。火車ハ揚の客人来るゝ。猪狩屋へいひ送をども。いまゞあづま路い来らず。まゝもや人とやうて。勤辞と問ひるる。其日ハ翠雲樓といへる方ふるしをの客来るしゆへ。かしふりたるよゝ学えけをば。火

車糸の毒よおりひ。此方の客人ハ。初舎の車るをば。早くやはこし。猪ハをど。詞と曲て憑るも。今出名の花魁ゑをばるを。

○十面由ら路るるもの

良久しゝて。五吾妻路ぶ小三板。繁野といへるがゝ！来て。花魁を人うゝへと告をば。火車ハ直よ席に立て出迎も。彼まつゝさ孤老と。狂ゝ来るさんが為ゝ。あづま路ハ翠雲樓の客人よ出ら迎けども いたく酒よ酔。やて牡丹が肩ふかゝをたりて。傳屋ゝ席上伏見浪し。孤老いあを為ゝ。余を湖と

指どすよ。火車ゑうとらく。吾妻路よくしうがひ
えて。見うるばえきりたる人ゑうと。仏中よおもへども。
大酔の時なるべ。恒よ廓中へ来る。賣油郎といふもつ
かず。被者人いおばろけよきりたる人よして。えよ名あ
る業にあらず。かの人と客とせば。諸人の物笑ひと。え
ぞしとらんよ。火車この汨よ物ゑろくといへども。ぬ武
いつきりて。花魁玉依とのたまふぞや。孤壱ハ鬆羽の蘇
山よて富ゑ出方ぬて。こたび京地ゑ物のためきりう
終へ水をば。あへてえ終うまいとを形しぬんぞ好き
業武おの方客ととべをやぬよ見人遠ひならんと

ふともなげよ五倍らん。平日よおとゑしと火車の。
新までよいへ人事をば。吾妻路もはようゑ
ゑへべくもあらず。補猫いいさばをて。御ざしきへあ
ゆを来る。その風姿げよ鳴鳳の一笑人月も恥たを。
花もけおさるゑの面かけゑ。火車さしづして余を
御が座右ふたりしゆ因初たいゆんの新爰ゑまば
吾妻路盃とゑりあげてよる。火車余を御がまへに
置。ときふ家菴ごかしへいを。そと盃をとりて三度
いたゞきたてのむよ。あつま路ハ。余を御ゞ手指の素様
のをさらず。ふていたらくをえて。あハどれをよと思

まゝしかりしかうつけんゝ伝ふこと。きのどくなまの。
る孤へ。人を殺たる。幇間二個まるよう。吹聽をきゝ。
余を淸い恵を産をたちて。幇間を孤を奪くし。ふるい
大山時。何国屋集が牙家。紙訪余を閣といへるもの
なり。こ後の出見なりゆくべしとて。記位書のおとく
夾伴ようる。全部百疋を出して。両個をあたへるきゝ。幇
間等ハ。客人の酒盛なりとおりて。もれをあーらひぬ。
吾妻路ハ始ようる深ざるうへ。彼ぶ如すがどの来れ
うさく紙さら咨ハ亭をもざる生名なるきゝ人を者ハ
ほうくうなんとふどとよ。そのまく産を立て。小軒み

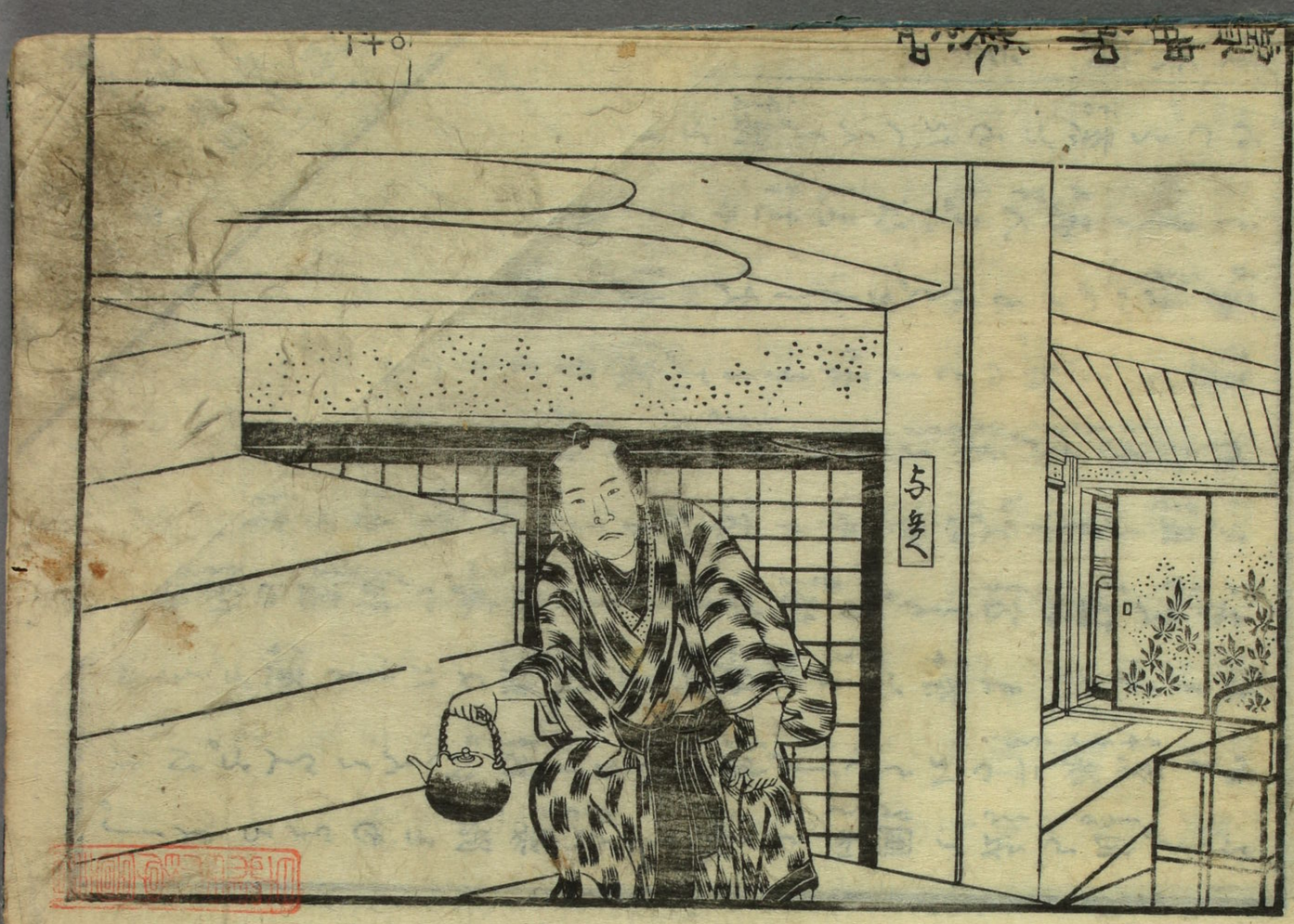
ふいたり。付ようく繁殖よりいひふくりて。庖厨ようさい
ようよせ。限を水く呑ぶけるきゝ。繁殖を見て。
孤慰を屋ようる。酔ほうをたまへが。多くをしようなど
いゝへども。我酒を酔じくといひて。まこへほけよ。
十蓋ぢうぞ飲干ようる。原来酒をたしむの性あれい。
笑酒後の酒。酔中の酔るきゝ。次来を酔を義してう
ほく伝るくぞ知ふるとてまことをふ。大廳た
けるハふ及ぶほど。孤雲のさぶあらハまて。後ハ歌
幇間も。いろくと朝妻しけきゝ。仲居ども笑ふうて。
国をとめて接へいざうよ。岩を余を閣中を除を。

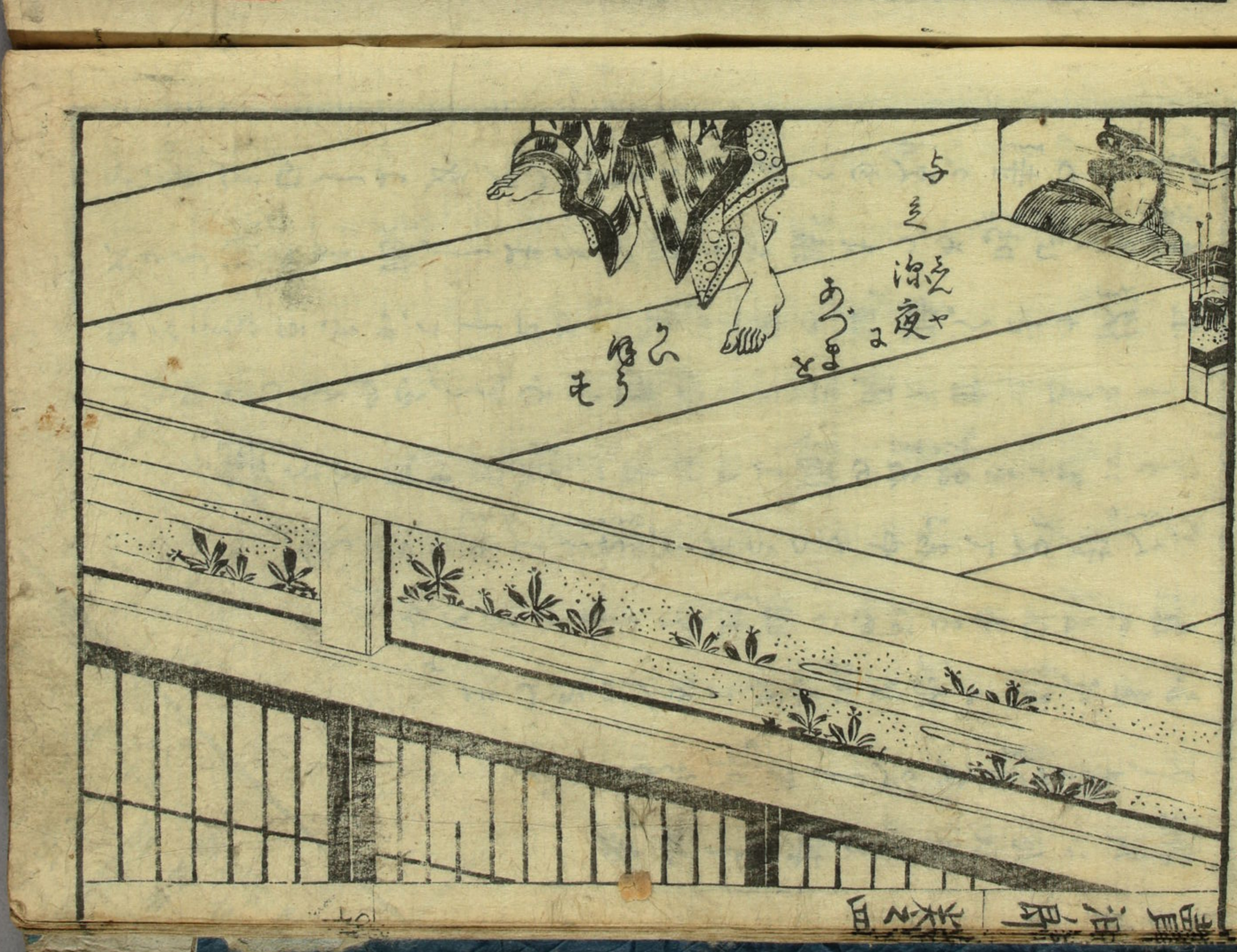
てゝそのやうをとゝろよ。金屏風逮つらねて。陰るの膳
褥後の膳禮。傷弥のまく〳〵一双よ。帝南香のかほり馥
郁として。恰も仙境よ入らとあやしまき。忽ち系と
うバとまて。謙る式。仲居まとゝろて。膳褥よ勸まい。
小三板ら舟後の。芳盤烟盤とゝげ出。まと茶とこぶ。
余ゝ衛ハ。国中の制度とうけどきび。大ひふうろたべ技
ゆを源山よ入おりひして。只よろづろんぎんよあつ
かへバ。小三板どもハ。おかしゞうて産と退ぞく。式よ余
ゝ衛ハ両手と添よあげし。彼居の今中まるうと汚ゝ
たう。美中烟花の分の呵責い。式蓮の出とね。八寒め

ゝたへやるうとゆきまくうよ。紙式呑。河よ呑まてあづよ路
ハ。そのとまきどけゆく。国中ふ入ゝまへ。かぶろ舟ハ御中
かよ。長き烟花よ。金花佐ぎて花魁よ成せバ。うりてこ
い付。余ゝ衛よさゝ出す。時いたゝきて気を呑。まろぶり
のかゝしげるを斜よらんて外境客のきたる男ゝまと。
水深ゝ。猫褌ぬぎてかいやり。ものともいとをしゝ。
ゝまふ分とひろがへして別ゝまい。小三板ゝもハかや
をゝとゝよ。余ゝ衛ハ公ハ羽折をぬぎて。またうち
たゝまんとゝると。盤壮ゝてたゝゝ。床の間よさしかき
者づゝ式ひらき者式とまて。芳盤烟盤よくちせ。

両個ともに出行ね。余之助ハあづま路を見るに。大ひに
酔つぶれて前後もしらずて寝入たれバ。飛驒客によふれ
んことをおそれて。被窩をきせ紙燈を引よせて。とく
りし火を挑げ。其身ハかたハらによりそひて。寝んとするに。
あづま路うつゝ心ありねども。大酔ふむねのあくるまゝし
きに寒く身とうごかさてもどりぬ。余之助ハ茶を
まいらせんとしといひて脊なかさすりて介抱す。時す
でに夜ふかまも過ぬれバ。揚屋しのさハがしきも次第にし
ひしくなりて。そこかしこにただの如く鼾をやうくげに、
竹批なることの音たえて。火あやうしのこゑとも。断れ

いづくの寺か鐘の音さえさへて身にしむ夜寒さと
覚し比時あづま路ふと目をさまし。酒気の猶さめざれ
ば萎がごとく。睡襖の中に身をおこして。から為つきとな
りし。然れバ余之助志まりに脊をなでしが心のうちにおもひ
けるハ。かくる出名の酒におぼれて。身をもおぼえず穢物を吐
バ人部屋見て名やくださんと。うろく心あらぬなひして。いそぎ
床の上にあるおのが羽織をとるうちにや吐べきやうを
なきバ。急に袖に我ればあてがへハ。あづま路心のまゝ吐流く
しばらく身がかへし給ひ。袖たりければ余之助ハ羽織に穢を
物かほひくさく。其まゝに床の間のもとにおきてける。


ちゑ


ちゑ
涼しやあつまさ
もうこの

あつを茶とあたへんと。樓をおりてもとめらるゝ。舍家にて
うまく藤入て。いびきをかゝるやうなる者あるべし。すべて
藤ゑいへるもあり。さるに火ハ夏の晴くがしこふあらん。
森しゝと。蝶のるくまをきて。廊下のうつる月うげ。又猶
あり。原来。廣くたる栖なるべし。何地へ行んと心まち
て。風ふきて火の口やく方へもとめ行。笑言を学ばけて。
おつ火協の方ゝ。ま焔をてらし。此妻の紀麦の仲居さ
たるゝ。あづま茶を乞ば。彼仲居後飯ゝたぐる茶をさしけ
れ。茶碗二つにうつし。盆ゝのせて持行んと。ひた
ゝ。自ら乞て国中ゝ帰ゝ。吾妻路をとゝさまし。

一盞をあたゝをべ。あづまを路たゞ飯ゝの尽しして。又一盞
ともとめて飯おハゝ。そのまゝ茶碗も志らず所ゝ。
爰まぼろしのごくゝ。さるゝ狂じねのあるゝ
や。折ゝ身をかへしてをゞくゝへ。余ゝ湯ハひたもの脊
ゝ。おろして。後ゝ歩ゝいたハるうち。陝ゝ志のゝ山に及びて。
戸傳ゝのをを弓さゝ。鶯の音花やうゝ学ゝ。
此時あづま路ハ。忽無と眼をさまし。脊をさゝ
るゝ。おのゝ小三板ゝ。ゝ法ゝ仏ゝ。ゝ
尼姿ひたる。客人ゝ。ゝ
衣のゝ体。ゝ所ゝ。ゝ

茶をのみ〳〵幸さど。おうひ出せば脚。うハ〳〵く。喜ぶ
枕〳〵にあるる。御畳紙〳〵つてかい之。余を酒にをに
舎敬して。屏風おしのけ出ぢ。よそ目ひ。面ハ笑ふ
らゝがごとく。安ハ線折のかやうふ似て。千万の彩を
ふばきられど。忽悪時むねよそぐ。余を酒ハたく解るが
ごく。今ぞ。うて来ろう。待そしてぞ居たりる。

○十一回　夏路ゐるもの

吾妻路ハ樓とおもて。かしこの房を所たる。二人のふ三枚
とおもをおこし。ゆゝべ酒をまたえうれて。題吐をれし
ゆゝるとき。茶をそこび。脊ゆるでしうと尋るに。さらよ

らぢと笑ゝゆへ。ゆハ終れそろを甘こ。夫抱あるし。
彼岩人ゐるよるゐ。ゆゝくとゆへの事なもひえるに心
よそまぬ人ゆへふかふさまう甘んといつう笑へぬ
酒とのゝて。周ゐハる。河もかハさば伏たりしと。弱ゐ
実人ゐまがやハう移ゝにゆるさんやいうゝしくく
我のゝうハ合家までゆたて。脚しゝ成えせんゐ。ゝハ
ゐくして。後をゐ新。脚しともふはさす。表たハ多成
せゐてかいふゐ。茶ゐてこび脊成ゐ〳〵つ心あつう成。
誰うゝハのどくゝゝんせつを尽す人やハあると。そぐろふ勿体
ゐくも。幸の毒ゐハゐもへども。又脊の往のゝるゐそび成

おもへば。孫くきをいたうよ。やうかいをば。其本性こぐこう
おらず。こもあらんかくやたらんと。公うとがひて扶孫
しが。付もせよ。分抱の礼を述んものと。聞にゑらんと
せしが。まと嘔吐の事同んも。とすがに恥かしくうとく
もてるせし事をおもへば。まれ毒ともとを立て。面式
合すべうもならずと。流吟せしが。こ公をきはめ一旦参
もて礼とのべ。台閣の名の上とも字笑。いよいよ。まことと
ある人おらば。又きあんもあるべしと。き人ゝ与為とよびて。
公況よしをかもこれ。又のはこし式ぐまし〳〵も憑める
〳〵ひ弱して。其名ハ両個の小三板と引つまて泊まば。

雲洲ハ嫂の国王行。余を衛ゐ對して。さう〳〵めしう式
いひて。屋くてうと述る。余を衛もうつま踏ゞ泊れて。
さまゝいるやそし事、式きるゆへ。公況をいるらずと
ず。て。茶式まいらせんと。夾帷とひらくと。雲洲さハ
し〳〵とゞめて。花魁を主ハもとや。宿もとへ泊まりといへるに。
尤あうバうたよはたへゆきと。いひて。茅さの恵し。国と
出んこと。叶ハ拉為床多羽れとゑとめていろハし
く。えあぐるうち。余を衛ハをでゝ小棲を下りぬ。豈斗
らんも叶羽織のうちゆ。一塊の探扨てをらんとか。
忽ちうふこばをあふきて狼藉う。扨島大ようどろ紀

あいかの客人が嘔吐よと推ちゝ。さすハ瓜がらの毒ゆ
ゑまゝ。浅間ふも。客の恥ハのつまゝ。幸ひ朝まゝの
事なまゝハ。推まるものもあらぢと。行とう、掃ぬくひ。
羽折ハ。よ水鮮のあまゝ。紙衾の仲居をもいて。
客人の羽折の。酒よぬまあまゝ。をゝ足ゝ。月に
かハうしてゆゝまといひて。おのゞ宿へうゝしゞ。有し和ゆ
やうとと。向よ和うゞまバ。羽れよ樣物の行くあうし
と。けしからぬ事におゆん。五人妻踏よ比沃かたらんと。粉房
ふちとゆひゝまバ。頭痛よるやゝ打仰て。小三板よ頭い
もこせ。笑ゝすらせこ。公況あしげ形ゝ由へまゝ共事をを

問てのらゞよべの客人ゝ。ゝ事辣ゝれ。充魁至ハさらせたよ
ハどや。羽折よ嘔吐を行くゝて。ゆらまし。ハ事ゝ。ゝ
あしかまいゝや。まとハたしゝるを酒ゝ。いけうるく飲まし
やと。あらまぬ事ゝ。かぞへたて。甚至ゝもゝて行れ
バ。あつまい踏ハ始て。嘔吐の行場とゝ。扶もをゞの源切
とゆりひたゝべて。扶も諫公ある人ゝるゝ小時猿くも桑
ゝよもて形し事よと。忽むねふたゞりて。積聚としこ。
拯ましげよゝえゝまハ。皆ゝ行どひゝて命抱ゝしぬの
づま踏ゝとも公のをめやられねバ。分のいたづゝと云こしらへ
二三日ハ打所しゞ。あゝをゝ。いとまゝ出名の分

るをバかの人の事のえ。汗ぶよハかくれどもそのまくる止ま
ぬるハ天良孫ともるるぞるや。嗚呼余を御が一年の恩
若。一枚のむだ事とかるハ幸をるしるさまども余を御い
あつま路が。ふり分うて大酔せしとハ家志らず。たゞわれ
を明よ。源をしとのをおもいて。拵弦まをふふしふをひ
て。意腹志をうよいや塔をと。まと外のはごをうつるをバ。
今一枚買ばべをまだをもるく。おりよよ他ハ夫人豪富の
暴もものよして。文よ其日よりの賣油郎に意をべを
ものふおらずと。忽癌腹の雲ふ成ちらひをまより
ハ兵生気よのくんとをどれ。日く油撞を荷ひて書つ

ふ出るゞ。一年あまり鴻京の御とけおしふ中ったを
まおはく身ぬるもい。各日ふかの所よりて油と粥南ふ
奇孫をせず。あつま路が反中をえてハ忽ち弦事ひひ
かまて。おもハず他が彩方よまたひちく。付糸の青梅ふへ
ゆきバ。跡おはげよ。を洗くしてかへる事。数回をまハいり
きこの人の目ふをまり。注いよしもるく。拵板屋のあつま路
をまよ。賣油郎が鉢想せしと。廓中よもをら此号のを
ふ出ふ。抑花御よ低陳の通中たる形。古来ふ長伝法の
まて。面目成ふしして拘間をふ。多体を肉へこ右まよ
据をたうを。左よ成独よ霞ひ。春の日の葉ハれるも。天の日

の炎とるも。塗たる高足駄をふと。摘長き傘式さしかけさせ。八文字ふみもあゆまして。他をうつうとどろゞ。制度もして。吾妻路も。偶よハかの賣油郎とゑる事あまと只注未と。のゝかすひしゝゑ。此帝有の事と。いひもやをゝ式まを少て。我もるゝしを考るをべ。一日かの賣油郎。紫茂播の彩下よいこひて。ゑ俗みる式ゑとめ。昔さあるハかの者ふやと。仔ふるく。れうし用こゑをバ。ゑの月れ孤老ふ。面さし孤。似ゝ。さをどもそをハ。鬆羽の豪富。てをハ孤——を男ゑれば。ふゝとそをともおもひ寄めず。勿論その日を絶しゝる客人の。風月樓のもとゝ来ませバ。そのまゝ考捜よ入ゑに。

老人素流よ。密よ式の事式かたをバ。ふ三板の繁野さゝしくもよく式ゑ。ゑて。彼者人よ遠ハゝといへるゆへ。羽之日長扨下へ。扨島をやりて。孫中式同しむるよ。さらふ似事をと事よとゝよゝゝて。一且そのうゝさゞひいえをぬをゞも。其のちまゝ賣油郎式ゑるふ。まがうべゝもあらず。笑よ中寄からゞるものハ。ふるをバ再ふ式うさふけてゝうゝゞへゝる。